



# 令和7年度 調査研究事業 報告書

「民間と連携した水泳授業の在り方」

福岡県体育研究所

令和8年3月

# 要旨

本調査研究事業は、学校における水泳授業の現状課題を踏まえ、近年広がっている「民間事業者(以下：スイミング)との連携による水泳授業」において、学校とスイミングとの連携による、よりよい水泳授業の構築に向けた方策を明らかにすることを目的とする。

近年、日本では学校プールの老朽化、維持管理費の増大、加えて猛暑・熱中症リスクの高まりなどを背景として、水泳授業の実施が難しくなる学校が増えている。実際、全国の自治体を対象とした調査では、「水泳授業を実施する公立小学校」のうち、スイミングに委託している自治体は20.4%、自校以外の公共施設などを活用している自治体は44.1%にのぼる報告もある。また、多くの自治体が屋内プールやスイミングを活用するモデルを導入し、安全性や実施継続性を確保しようとしている。

本調査研究事業では、こうした背景を踏まえ、児童生徒・教員・スイミングを対象にアンケート調査およびインタビュー調査、授業視察を行った。アンケートでは、児童生徒の学習意欲や泳力向上の実感、水泳授業の満足度や期待感、教員の負担感や満足度、指導や役割分担に関する意識、スイミングの連携体制や役割分担に関する意識などを定量的に把握した。インタビューでは、教員とスイミングから授業設計、指導上の課題、安全管理、連携意識などを定性的に把握し分析した。

その結果、児童生徒の多くが「水泳が楽しい」「進んで授業に参加している」「泳ぎを理解している」、「専門的な指導がわかりやすい」とスイミングによる水泳授業を肯定的に捉える回答であった。また、教員側からも「専門的な指導により子どもの泳力向上を実感している」、「指導体制に満足している」、「教職員の負担が軽減された」との評価があり、よりよい指導体制の構築や業務の負担軽減に寄与していることがうかがえる。一方で、教員から「民間と連携した水泳授業で課題に感じていることがある」といった意見や、スイミングから同様の意見や「児童生徒に関する情報共有が不十分」という意見もあり、連携の在り方や連携した授業の構成には慎重な設計が必要であることが明らかになった。

本報告書では、こうした調査結果をもとに、民間と連携した水泳授業の現状と効果、留意すべき課題を整理し、学校現場にとって実行可能かつ持続可能な授業モデルの方向性を探る。特に、スイミングによる専門的指導と学校教員の指導を組み合わせた指導体制を提案し、児童生徒の安全・安心・技能の向上はもとより豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の向上、教職員の負担軽減、そして地域資源の有効活用の観点から、その有用性を示すものである。本研究の知見が、今後の水泳授業の改善・再構築の一助となることを期待する。

# 目次

## 要旨

### 1. はじめに

- (1) 背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- (2) 諸課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- (3) 本研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1-2

### 2. 調査研究の方法

- (1) 調査対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- (2) 調査内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3-4

### 3. 調査研究の結果

- (1) アンケート調査の結果・・・・・・・・・・・・・・5
- (2) インタビュー調査の結果・・・・・・・・・・・・・・11
- (3) 授業視察の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
- (4) 調査の総括(成果と課題)・・・・・・・・・・・・・・17

### 4. 考察

- (1) 民間と連携した水泳授業の教育的価値・・・・・・・・18
- (2) 教員の負担軽減・・・・・・・・・・・・・・・・・・18-19
- (3) 連携の在り方と学習評価に関する課題・・・・・・・・19
- (4) 学校体育における民間との連携の位置づけ・・・・・・・・19

### 5. 今後の民間と連携した水泳授業への示唆

- (1) 連携した授業構成に向けた事前の打ち合わせの重要性・・20
- (2) 教員による指導場面の重要性について・・・・・・・・22
- (3) 指導と評価の一体化に向けて・・・・・・・・・・・・23

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

付録(単元計画例)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

# 1. はじめに

## (1)背景

水泳は、日本において長年にわたり学校体育の重要な一環として位置づけられてきた。歴史的には、1955年に発生した海での水難事故を契機として、全国的に学校プールの設置が進み、1960年代の学習指導要領の改定で、水泳は小学校から中学校までの必修項目となった(笹川 2024)。しかしながら、近年、多くの学校でプール施設の老朽化や維持管理コストの高騰、修繕のための財政負担、安全管理の難しさ、加えて夏の猛暑や天候不順による授業中止の増加など、学校水泳を取り巻く環境が厳しさを増している。また、屋外プールでは天候に左右されやすく、熱中症や水温管理の問題から、安全性や授業の安定実施に不安があるとの報告もある。加えて、プール管理にかかる教職員の負担も無視できない(朝日 2025)。

こうした状況を背景に、多くの自治体や学校が「民間施設(スイミングなど)の屋内プールを活用する」「民間指導者に水泳指導を委託する」といった新たな水泳授業の形を模索し始めている。たとえば、最近公表された全国調査では、公立小学校の20.4%がスイミングへ委託し水泳授業を実施しており、さらに44.1%が自校以外の公共施設・民間施設を活用していることが示された。また、複数の市区町村では、モデル事業として民間施設活用による水泳授業を導入し、安全性・安定性・コスト面での検証を進めている(笹川 2024)。

## (2)諸課題

こうした動きには、期待される利点が多い一方で、留意すべき課題もある。まず、民間指導者に水泳の指導を委ねることで、教員の責任がどのように担保されるかは慎重に考える必要があり、学校教育そのものの価値が問われることとなる。また、単元の目標や授業のねらい、学習評価など、学校とスイミングとの間で、目標共有・役割分担・情報共有等の連携が十分でない場合、児童生徒の学習に対する理解の不足や意欲の低下につながる可能性がある。さらに、民間施設への移動手段、安全管理体制、費用負担、公平性の確保といった実務上の問題もある。

また、近年は学校によっては水泳授業自体を中止し、代わりに教室での「水の安全」学習のみを行う例も報告されており、実技経験の機会の喪失や、子どもの泳力低下といった社会的な懸念も広がっている。こうした状況は、子どもの命と安全に関わる根幹として、水泳教育の在り方を改めて問い直す必要性を提示している。

## (3)本研究の目的

本研究は、上記のような背景と課題を踏まえ、以下の問いに対して実証的な検討を行うことを目指す。

- ① 民間連携による水泳授業は、児童生徒の授業満足度や泳力向上、教職員の負担軽減などにおいて、どのような効果を持つのか究明する。
- ② よりよい水泳授業に向けて、スイミングと学校教員における望ましい連携体制の在り方、注意すべき点について究明する。
- ③ 民間と連携した授業における、学校教育としての価値を見出すための教員による指導の在り方について究明する。

本報告書の後半では、これらの問いに対する調査結果を整理し、学校現場にとって実行可能な「連携体制構築に向けた方途」の提案及びその応用に向けた示唆を提示する。

## 2. 調査研究の方法

### (1) 調査対象

本研究の調査対象は、スイミングとの連携により水泳授業を実施している福岡県内の公立小学校及び中学校である。

### (2) 調査内容

本研究における調査内容は、①アンケート調査、②インタビュー調査、③授業視察（施設視察）の3種類である。

#### ① アンケート調査

教員アンケートには当該校に勤務する担当教員が回答した。インストラクターアンケートには水泳授業を実施しているインストラクターの代表者が回答した。児童生徒アンケートは、対象校に在籍し水泳授業を受けている小学生および中学生を対象とし、原則、授業視察を行った学年の児童生徒が回答した。

| 教員アンケート  | インストラクターアンケート   | 児童生徒アンケート   |
|--|---|---|
| 指導体制、教員の負担軽減、スイミングとの連携、課題点の観点から設問を構成した。回答形式は主として4件法とし、補足的に自由記述欄を設けた。 | 児童生徒について、学校との連携、課題点の観点から設問を構成した。回答形式は主として4件法とし、補足的に自由記述欄を設けた。 | 授業の楽しさ、技能向上実感、説明理解度、主体的取り組み、次年度への意欲等の観点から設問を構成した。学齢差を考慮し、理解しやすい表現を用いて4件法を基本とした。 |

これらのアンケートから、授業に関する認知評価および学習成果の自己評価を量的に収集した。

#### ② インタビュー調査

アンケートでは捉えきれない授業運営上の実態や連携過程を明らかにするため、各学校の水泳授業担当教員とスイミングの指導者を対象にインタビュー調査を実施し、授業運営上の課題や連携の実際に関する質的情報を収集した。

主なインタビュー内容

| 教員インタビュー  | インストラクターインタビュー   |
|---|--|
| ○授業計画（目標設定・指導内容の共有）について<br>○教員と民間指導者の実施体制（指導・補助指導・監視）について | ○学校との連携の背景について<br>○学校との連携及び役割分担について<br>○指導方針、カリキュラムについて<br>○安全管理について |

|  |                             |
|--|-----------------------------|
| ○安全管理および事故防止策について<br>○学習評価および情報連携方法について<br>○保護者や地域について<br>○今後について(成果と課題) | ○学習評価について<br>○今後について(成果と課題) |
|--|-----------------------------|

回答内容の記録に基づき整理し、「成果」および「課題」に関連する記述を抽出した。アンケート結果との整合を検討しながら、量的データを補足する形で解釈に用いた。

### ③ 授業視察

スイミングにて実施する授業における環境および指導実践を把握するため、複数個所の施設視察を行った。

#### 視察のポイント

- 児童生徒のグループ編成について
- インストラクターと教員の役割について
- 教員とインストラクターの子どもへの声掛けについて
- 児童生徒の活動内容および学習の雰囲気について

授業視察結果はフィールドノートに記録し、モデル授業デザインにおける教員や民間指導者の指導形態や指導内容、児童生徒の活動内容を検証する材料として用いた。

### 3. 調査研究の結果

#### (1) アンケート調査の結果

##### ア 教員アンケート(n=19)

本アンケートは、県内の小中学校において、令和7年度に水泳授業をスイミングとの連携によって実施した学校の教員を対象に、指導体制、児童生徒の変容、教員の負担感などについて意見を収集したものである【表1】。

【表1 教員アンケートの結果】

|         | 指導体制に満足している | 児童生徒の泳力が向上している | 教員の負担が軽減されている | 教員の監督・指導は適切だと思う | インストラクターとの連携はスムーズ | 指導方針の共有は適切に行われている | 民間との連携した水泳授業がある |
|---------|-------------|----------------|---------------|-----------------|-------------------|-------------------|-----------------|
| そう思う    | 84%         | 63%            | 79%           | 63%             | 44%               | 37%               | 11%             |
| 少し思う    | 11%         | 32%            | 16%           | 37%             | 50%               | 63%               | 47%             |
| あまり思わない | 5%          | 5%             | 5%            | 0%              | 6%                | 0%                | 26%             |
| そう思わない  | 0%          | 0%             | 0%            | 0%              | 0%                | 0%                | 16%             |

#### (ア) 指導体制への満足について

民間と連携した指導体制については、回答した教員の95%が肯定的に評価しており(そう思う84%+少しそう思う11%)、満足度が非常に高いことが分かった。技術面での正確な説明、個別に応じた指導など、多くの教員が、専門性の高いインストラクターによる指導を高く評価した。

さらに、インストラクターが複数配置されることにより、安全面での監視体制が強化され、児童生徒に目が行き届きやすくなったという意見も多く見られた。加えて、プールの水温・水質管理が行き届いた環境で授業が実施されるため、児童生徒が活動しやすい環境が整っている点も評価されている。

#### (イ) 児童生徒の技能向上について

児童生徒の泳力向上については95%の教員が「向上が見られた」と回答しており(そう思う63%+少しそう思う32%)、指導効果の大きさが明確に示された。昨年度よりも長く泳げるようになったなど、児童生徒の泳力の向上について教員が実感していることに加え、児童生徒自身も実感しているという意見が多数あった。

また、インストラクターの専門的な指導により、「説明が分かりやすい」「子どもが納得しやすい」といった意見も寄せられ技能の伸びに繋がっていると考えられる。また、水に対して苦手意識のあった児童生徒が自信を持って取り組めるようになった例も複数報告されている。

#### (ウ)教員の負担軽減について

教員からは、民間と連携した水泳授業の展開により大幅に負担が軽減されたという意見が多く寄せられた。特に、従来教員が担当していたプールの清掃・水質管理、準備や片付け、監視体制の確保などの作業がなくなり、児童生徒の安全確認や個別の支援に集中できるという意見が多数出ている。特に小学校の教員からは「他教科との両立がしやすくなった」という回答があり、教員の働き方改革に寄与していることが明らかになった。

#### (I)教員の監督・指導の適正性について

アンケート結果からは、すべての教員が「教員の監督・指導は適切である」と肯定的に回答しており、学校側の役割が十分に発揮されていることが確認された。この背景には、インストラクターが専門的な技術指導の中心を担うことで、教員は水中での指導とプールサイドでの指導に役割がわかれ、これまでより広い視野で安全の確保や個別の支援ができるようになったからであると考えられる。そのような肯定的な回答を得ることができた学校は、スイミングとの役割分担が明確であることが分かった。

#### (オ)インストラクターとの連携について

インストラクターとの連携については、回答した教員の94%が肯定的に評価しており(そう思う44%+少しそう思う50%)、指導方針の共有に関してはすべての教員が肯定的な回答をしている。肯定的な回答をしている学校については、授業前後の打ち合わせにより、授業の流れや指導内容、児童生徒の実態を共有しながら進めることができていることが分かった。

#### (カ)課題の認識について

民間と連携した水泳授業には多くの利点と教育的効果がある一方、一定数の教員が課題を感じていることも明らかとなった。主な課題は「授業回数が少なく、評価が難しい」や「学習指導要領との整合性の検討」についてであった。特に授業回数に関する意見が多くあり、その結果として評価の方法について課題を感じている教員が多いことが分かった。

## イ インストラクターアンケート(n=7)

本アンケートは、県内のスイミングにおいて、令和7年度に公立小中学校と連携した水泳授業を実施したインストラクターを対象に、児童生徒の学習状況、児童生徒の情報及び指導方針等の共有、運営上の課題などについて意見を収集したものである【表2】。

【表2 インストラクターアンケートの結果】

|         | 度反児<br>は応童<br>よや生<br>い理徒<br>解の | で情児<br>き報童<br>て共生<br>い有徒<br>るがの | ズ携教<br>かは員<br>スと<br>ムの<br>！連 | 行ムカ指<br>えのり導<br>て共キ方<br>い有ユ針<br>るがラヤ | とじて授<br>がて課業<br>あい題に<br>るるに<br>こ感じ |
|---------|--------------------------------|---------------------------------|------------------------------|--------------------------------------|------------------------------------|
| そう思う    | 100%                           | 86%                             | 71%                          | 72%                                  | 29%                                |
| 少し思う    | 0%                             | 0%                              | 0%                           | 14%                                  | 71%                                |
| あまり思わない | 0%                             | 14%                             | 29%                          | 14%                                  | 0%                                 |
| そう思わない  | 0%                             | 0%                              | 0%                           | 0%                                   | 0%                                 |

### (ア) 児童生徒の反応や理解度

スイミングのインストラクターによるアンケート調査の中で最も特徴的であったのは、児童生徒の学習態度や意欲の高さである。回答した全員が「児童生徒の反応や理解度はよかった」と肯定的に述べている。具体的には「泳げるようになったと実感した児童生徒が多かった」や「回数を重ねるごとに泳力が向上している」という回答があり、インストラクターは泳法の指導をしながら児童生徒の技能向上について実感していることが伺える。

### (イ) 児童生徒の情報共有

児童生徒の情報共有については、ほとんどのインストラクターが「十分に共有されている」と回答している。授業前後の申し送りによって児童生徒の状況を把握し、配慮が必要な児童生徒に関しては事前の打ち合わせで情報共有をするなど、多くのスイミングで情報共有がなされたうえで指導できている点が評価された。しかし、特別支援学級の子どもについて、接し方等の情報共有をしてほしいといった声が上がっていた。このように、特に配慮が必要な児童生徒については、事前に配慮点や有効な支援方法が共有されているかによって、安全の確保や学習の進め方が大きく変わるため、学校側と民間指導者との情報共有の精度向上が今後の重要な改善点となる。

#### (ウ) 教員との連携

民間と連携した水泳授業における、インストラクターと教員の連携については、71%が肯定的に評価しているが、29%は否定的な評価をしていることが分かった。特に、肯定的な内容として、児童生徒の入れ替えや移動、更衣などの場面で教員の協力が見られたり、児童生徒の情報について直接話をしながら連携をとったりしているという回答がみられた。一方で、学校によって連携の質に差があることも明らかとなった。学校との打ち合わせは行っているが、内容が担任レベルまで伝わっているのか不安という声や児童生徒が自身の最終泳力を知らないまま終わっているなどの声も上がっている。このように事前の打ち合わせはできているが学級担任や保健体育の教員との打ち合わせが密に行えていないことが伺える。このような状況から連携をうまく図ることができていないと感じていると考える。

#### (I) 指導方針やカリキュラムの共有

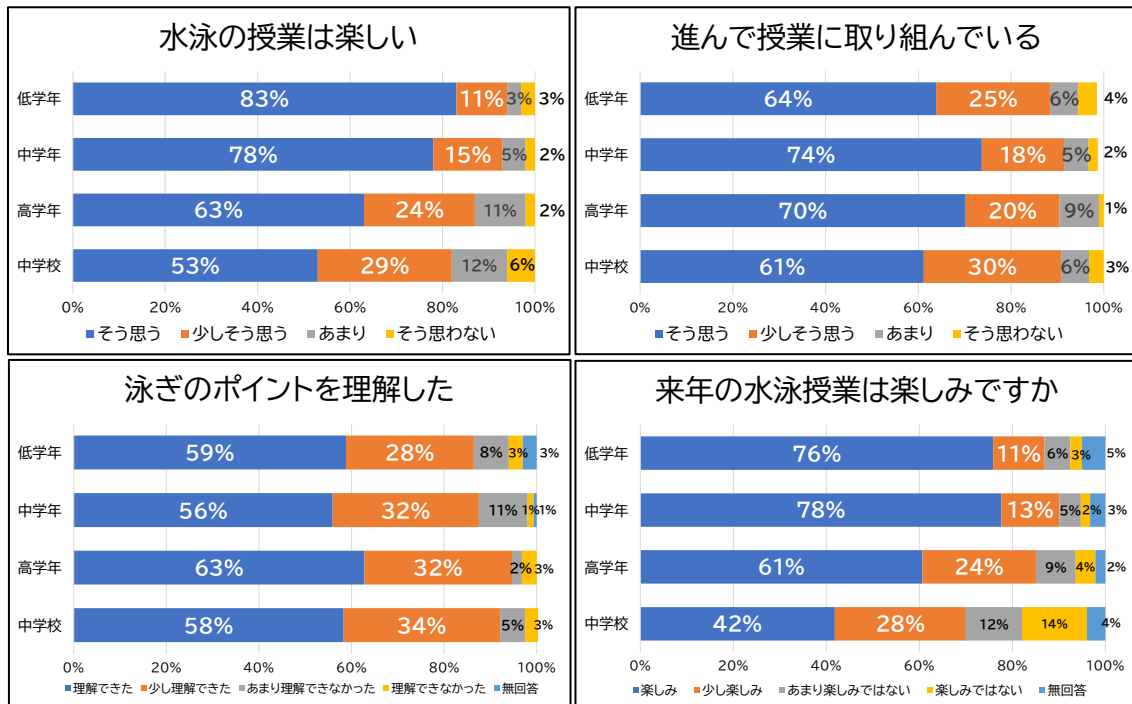
指導方針やカリキュラムの共有については、多くのインストラクターが「概ね共有されている」と回答している。学校側からは事前に指導目標が提示され、それをもとにスイミング側がクラスの実態に合わせた指導を行うなど、基本的な連携体制は確立されているところが伺える。一方で、指導方針とカリキュラムの共有が十分ではないという声も上がった。特に学校側からの要望等がないことから「適切な指導が実施されているか」、「学校とスイミングで目標が一致しているか」といった不安の声が上がっている。指導方針や各学級の実態に応じた目標設定については、教員との事前協議の場を確保し、双方が共通の方向性をもって授業に臨む体制の構築が必要である。また、教員が水泳授業に関する指導意図を明確に伝達する仕組みづくりも、授業改善に寄与すると考えられる。

#### (オ) 運営上の課題

インストラクターからの回答では、多くの場面で質の高い指導が行われている一方、授業運営や指導においていくつかの共通した課題が指摘された。アンケートの結果から、すべてのインストラクターが授業に関する課題を感じていることがわかる。インストラクター1名あたりが指導する児童生徒の数が多なことや、水泳が苦手な水慣れが必要な子どもへの指導回数が少ないことなど、環境面に関する声があった。また、学校によっては教員がプールサイドやプールに入らず、児童生徒が頑張っているところや課題を直接把握できないケースがあることやカリキュラムについて十分に共有されていないなど、教員との連携に関する声が上がった。

## ウ 児童生徒アンケート（n=1205）

本アンケートは、県内の小中学校において、令和7年度に水泳授業をスイミングとの連携によって実施した児童生徒を対象に実施し、水泳授業に対する意識、楽しさ、学習への主体性、学習の理解度、次年度への意欲など、多様な観点からデータを収集したものである【資料1】。



【資料1 児童生徒アンケートの結果】

### (ア)水泳が楽しい

アンケート結果によると、80～90%の児童生徒が「水泳授業は楽しい」または「少し楽しい」と回答しており、全体として極めて高い満足度が示された。特に小学校低中学年では9割を超える児童が肯定的に回答しており、水泳授業に対して非常に前向きな姿勢を持っていることが確認された。

楽しさの理由として、「泳ぐことが好き」、「前より泳げるようになった」、「新しい泳ぎができるようになった」といった技能向上に伴う達成感を挙げる児童生徒が多く、技能の向上が満足度に直結している傾向が見られる。一方で、少数ではあるが「泳げない」「水泳が嫌い」といった水泳に対する不安や否定的な意見を理由に楽しめていない児童生徒も存在し、学年が上がるにつれてこうした傾向が強く見られた。

### (イ)進んで授業に取り組んでいる

「進んで授業に取り組んでいる」については、全学年通して 80～90%が肯定的であり(そう思う+少しそう思う)、主体的に学ぼうとする姿勢が広く見られた。

適度な難易度と成功体験の積み重ねなどの「学習内容と活動」が、意欲向上に寄与していると考えられる。

(ウ)泳ぎのポイントを理解している

「泳ぎのポイントを理解できた」についても、90%以上が肯定的(理解できた+少し理解できた)な回答をしている。

理解の理由としては、「インストラクターの指導がわかりやすかった」、「友達に教えてもらったから」、「自分で工夫した」といった回答があがった。さらに、すべての学年において「インストラクターの指導」により泳ぎのポイントを理解している児童生徒が多かった。インストラクターによる専門的な指導が技能向上に向けた動きの理解度に大きく寄与していることがわかる。

(I)次年度への期待

来年度の水泳授業についても、70～90%の児童生徒が肯定的な回答をし(楽しみ+少し楽しみ)、継続意欲は非常に高い。水泳授業の満足度や主体的に学習に取り組もうとしている児童生徒が多いことが、水泳授業が体育の領域のなかでも楽しみな領域の1つとなっていると考える。

## (2) インタビュー調査の結果

### ア 教員インタビュー(12校)

本インタビュー調査は、県内の小中学校において、令和7年度に水泳授業をスイミングとの連携によって実施した学校の教員を対象にし、計画立案の在り方、授業実施時の役割分担、安全管理、学習評価、について実感に基づく意見を集約した。調査方法はインタビュー形式とし、具体的な事例や感じている課題について聞き取った。これにより、数値化されたアンケートでは把握しにくい、学校現場ならではの実態や意識を明らかにすることを意図した。

#### (ア) 計画について

水泳授業の計画立案については、学校、スイミング、教育委員会のいずれか、または複数が関与する形で行われており、その関与の度合いや役割分担は学校ごとに大きく異なっていることが明らかとなった。学級担任や体育担当が指導計画の作成に一定程度関与している事例が多く、そのような場合には、学校の教育方針や児童生徒の実態が反映されたうえで水泳授業の計画が立案されている傾向が見られた。一方で学校が水泳授業の計画立案に関与せず、概要のみが共有されていることもあった。

#### (イ) 指導体制の実態について

授業当日の指導は、専門性を有するインストラクターが中心となっており、教員は安全管理の補助、見学者対応、児童生徒の観察などを担う体制が一般的であった※前項参照。事前または当日に打ち合わせを行い、役割分担や指導の流れを確認している学校では、授業が円滑に進行し、教員とインストラクターの間に一定の信頼関係が築かれている様子が伺えた。一方で、打ち合わせの時間が十分に確保されていない場合には、教員・インストラクター双方が状況に応じて臨機応変に対応せざるを得ず、不安や戸惑いを感じる場面もあるとの意見があった。また、教員の関わり方については学校間で差があり、プールサイドから積極的に声かけや見取りを行う学校と、見守りにとどまる学校が存在している。

#### (ウ) 安全の確保について

安全管理については、多くの教員が「概ね適切に行われている」と評価している。事前の健康調査や参加確認、インストラクターや教員の複数配置などにより、事故防止に向けた体制は整えられているとの認識が共有されている。一方で、緊急時の対応手順や責任の所在については、学校ごとに理解や認識に差があることが明らかとなった。特に、入水している児童生徒の体調不良や事故等が発生した際の判断や

連絡体制について、明文化されたルールが十分に共有されていないケースも見られた。

#### (I) 学習評価について

学習評価については、技能の評価では、泳力やフォームを教員が様相観察から見取るようにしている学校がほとんどであった。中には市町内共通のプールカードを6年間使用し、それをスイミングと共有している学校があった。「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」といった観点については、授業時間の制約や教員の関与の少なさから、十分に見取ることが難しいとの意見が多く挙げられた。また、評価規準や評価の見取り方法について、学校とスイミングとの間で共有している学校とそうでない学校があった。

#### (オ) 学校が感じる成果

民間と連携した水泳授業の成果として、多くの教員が安全性と専門性の向上を挙げている。インストラクターによる専門的で手厚い指導により、泳力の向上を実感しているとの声が多く上がった。また学校での授業と比べると指導者数が多く、事故のリスクが低減され、児童生徒一人ひとりに目が行き届きやすくなっている点が高く評価されている。さらに、天候に左右されず安定して授業が実施できることや、教員のプール管理・監視に関する負担が軽減される点も肯定的に捉えられている。児童生徒から「楽しい」「もっと泳ぎたい」といった声が多く聞かれることも、学習意欲の向上という観点から大きな成果であると考えられる。

#### (カ) 今後に向けた課題

成果があがっている一方で、授業時数の少なさや、教員の指導関与の在り方、評価方法の整理など、共通する課題も明らかとなった。特に授業時数(スイミングでの実施回数)を増やしてほしいという声が多く上がった。授業時数が少ない学校では、「子どもの成長を見取りにくい」や「学習評価が難しい」という意見があがった。

## イ インストラクターインタビュー(8名)

本インタビューは、県内のスイミングにおいて、令和7年度に公立小中学校と連携した水泳授業を実施したインストラクターを対象に、学校との連携の背景、学校との連携や役割分担、指導方針や安全管理、学習評価について実感に基づく意見を集約した。調査方法はインタビュー形式とし、具体的な事例や感じている課題について聞き取った。これにより、数値化されたアンケートでは把握しにくい、現場ならではの実態や意識を明らかにすることを意図した。

### (ア) 学校との連携の背景について

インストラクターへのインタビューからは、連携した水泳授業が導入された背景として、学校プールの老朽化、維持管理に係る負担の大きさ、などが共通して認識されていることが明らかとなった。

特に、近年は学校単独で安全かつ安定的に水泳授業を実施することが困難になっている学校が増えており、コロナ禍を契機として、自治体により水泳授業をスイミングと連携して行うようになった経緯が語られている。

### (イ) 学校との連携及び役割分担

インタビューでは、教育委員会・学校・スイミングの三者による役割分担が、一定程度整理されていることが示された。指導そのものはインストラクターが担い、教員は主に監視、児童生徒対応、健康面の把握を行う体制が多かった。一方で、学校ごとに教員の関与の度合いには差があり、事前打ち合わせが十分に行われている学校とそうでないところがあることが分かった。

### (ウ) 指導方針・カリキュラムについて

インストラクターは、学校から示される学習目標を尊重しつつも、限られた授業回数の中で成果を上げるためには、スイミングとしての実践的な指導経験を生かす工夫をしている。特に、泳力の向上に重点を置くのではなく、「水に対する恐怖心の軽減」、「水泳に対する肯定的な感情の形成」という点を重視しているという声が多く、多くのインストラクターからあがった。そのため、普段のスイミングのカリキュラムとは異なる泳力別指導や遊びの要素を取り入れた練習など、児童生徒が「楽しい」「できた」と感じられる構成を意識して指導していることが分かった。

### (I) 安全管理について

水中指導員と監視員を複数配置し、定期的な人数確認や水底確認を行うなど、施設としての安全管理体制は十分に整備されているとの認識が共有されている。一方

で、緊急時対応については、施設側のマニュアルは存在するものの、学校側と十分に共有されていない場合があることが課題として挙げられた。

(オ) 学習評価について

学習評価について、インストラクターは基本的に「最終的な評価は学校が行うもの」と認識しており、自らが直接評価を行う場面はほとんどない。中にはスイミングの視点からフォームやタイムなどの技能的な評価を行い、その結果を学校へフィードバックしている事例も見られた。

(カ) インストラクターにとっての成果

インストラクターは、連携した水泳授業の成果として、泳力向上だけでなく、泳ぎが苦手な児童生徒が達成感を得られる点を高く評価している。「最初は水に入るのを嫌がっていた子どもが、最後には笑顔で泳げるようになる。」といった具体的なエピソードが語られ、指導のやりがいや意義を実感している様子が伺えた。

また、児童生徒が水泳に前向きな姿勢を示すようになることは、インストラクター自身の指導意欲の向上にもつながっていることが分かった。

(キ) 今後に向けた課題

一定の成果が伺える一方で、指導回数や期間、人材確保の難しさなどの課題も指摘された。インストラクターの専門性を十分に生かしつつ、学校との連携をより強化することで、水泳授業の教育的価値をさらに高めていくことが求められる。

### (3) 授業視察の結果(12校)

授業の視察調査では、県内の小中学校において、令和7年度に水泳授業をスイミングとの連携によって実施した実際の授業を視察し、授業の活動内容、指導の体系、指導方法、安全管理における共通点や傾向を整理したものである。

#### ア 活動内容に関する共通点・傾向

##### 泳力別グループ編成を基盤とした活動構成

すべての事例において、「泳げる・中間・泳げない」あるいは「初級・中級・上級」といった泳力別グループ編成が基本となっている。自己申告や事前把握をもとにグループ分けを行い、同一授業内で複数の異なる活動が並行して実施されている。「低学年：水慣れ・浮く・もぐる・進む」、「中学年：バタ足・け伸び・簡単なクロール」、「高学年・中学生：クロール・背泳ぎ・記録測定」という段階的な系統性ある指導内容が確認できた。低～中学年では、遊びを取り入れた活動が多く、楽しさを通して自然に技能を身に付けさせる工夫や水への恐怖心をなくすための工夫が見られた。高学年・中学生では泳法の指導や記録会が実施され、目標設定が達成感の獲得に繋がっていることが伺えた。

#### イ 指導の体系・指導方法

##### インストラクター主導の専門的な指導

水中での直接指導はインストラクターが担い、「手取り足取りの補助」「一人ずつのフォーム修正」「オノマトペや具体的な言葉がけ」など、専門性を生かした即時的なフィードバックが特徴的である。教員は主にプールサイドから見守り、補助等を行っていたが、教員がT2として入水する事例もあり、学校の方針や学年に応じた柔軟な関与が行われている。すべての学校でビート板が中心的な教具として用いられており、「け伸び→バタ足→手のかき」と段階的に技能を分解して指導している。教具を外すタイミングも泳力に応じて調整されており、技能定着を意識した体系的な構成が確認できる。

#### ウ 安全管理について

監視員の配置、複数指導者体制、定期的な人数確認など、安全を最優先とした運営が全体に共通していた。見学している児童生徒への対応を教員が担うことで、インストラクターが水中指導に専念できる体制が構築されている。

## エ 全体的な傾向のまとめ

本視察記録からは、以下のような共通した特徴を見ることができた。

- 泳力別グループ編成を基盤とした個別最適な学習環境
- 水慣れから泳法へとつながる一貫した指導の系統性
- 遊び・競争・記録会を効果的に用いた水泳の楽しさを味わう授業構成
- インストラクターの専門性を生かしたきめ細かな直接指導

これらは、民間と連携した水泳授業が、「安全性・専門性・学習意欲の向上」を同時に実現していることを示す共通的な傾向であると言える。

#### (4) 調査の総括（成果と課題）

本研究では、民間と連携して実施されている水泳授業の実態と効果を明らかにするため、児童生徒および教員・インストラクターを対象としたアンケート調査、教員・インストラクターへのインタビュー調査、さらに授業視察を実施した。これらの調査結果を総合的に整理することで、民間と連携した水泳授業の特徴と、そこから浮かび上がる成果および課題が明確となった。

まず、アンケート調査からは、児童生徒の多くが水泳授業を肯定的に捉え、意欲的に取り組んでいる実態が示された。教員・インストラクターアンケートにおいても、授業を実施する環境や安全管理や指導体制に対する評価は概ね高いことが数量的に確認された。これらの結果は、スイミングの専門性や施設環境が、授業の質の向上に一定程度寄与している可能性を示している。

次に、インタビュー調査および授業視察からは、アンケート結果を補完する具体的な実践の様子が明らかとなった。泳力別グループ編成を基盤とした技術指導、水慣れから泳法へと段階的につなげる体系的な指導、安全を最優先とした運営体制などは、学校や学年を超えて共通して確認された特徴である。また、インストラクターによる水中での直接指導と、教員によるプールサイドでの見守りという役割分担が、多くの事例で定着していることも示された。さらに、民間との連携による水泳授業は、教員の負担軽減や安全面に対する心理的負担の軽減という側面を有していることも、複数の調査から読み取れた。

一方で、これらの成果が一様に発揮されているわけではない点も明らかとなった。インタビュー調査からは、学校とスイミングとの事前の情報共有や教員の関与の度合いに差があり、それが授業の一体感や評価の在り方に影響している可能性が示唆された。また、学習評価については、技能についての評価は行われているものの、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価の位置づけが必ずしも明確でない状況が確認された。

以上のように、本調査研究の分析からは、民間と連携した水泳授業が、専門性と安全性を基盤とした一定の成果を上げていることが確認される一方で、教員の関与の在り方、学習評価の整理、連携の質といった点に課題が内在していることが明らかとなった。これらの結果は、単なる事実の列挙にとどまらず、民間と連携した水泳授業を学校体育としてどのように位置づけ、どのような意味を持つものとして捉えるかという、より本質的な問いを提起するものである。

## 4. 考察

本章では、以上の調査分析の結果を踏まえ、民間と連携した水泳授業の成果と課題について、その背景や意味を考察する。具体的には、専門性の高い指導や安全管理体制が児童生徒の学習意欲や授業の質にどのような影響を与えているのか、また、教員の役割や負担軽減が学校体育としての水泳授業にどのような意味を持つのかといった点について整理する。併せて、学校とスイミングとの連携の在り方や学習評価をめぐる課題を、学校体育全体の文脈の中で位置づけ、民間と連携した水泳授業の可能性について検討する。

### (1)民間と連携した水泳授業の教育的価値

本研究の調査結果から、民間と連携した水泳授業は、単に水泳技能の習得を目的とするにとどまらず、学校教育として多面的な教育的価値を有していることが明らかとなった。その価値は、専門性の高い指導による学習の質の向上、安全性の確保、さらには児童生徒の学習意欲や態度形成といった側面において確認される。

まず、スイミングが有する水泳指導の専門性は、児童生徒一人一人の実態に応じた学習機会を保障する上で大きな意義を持っている。泳力別に編成された指導体制や、水慣れから泳法習得へと段階的につなげるカリキュラム構成は、限られた授業時数の中でも無理のない学習の積み重ねを可能にしている。これは、技能の向上だけでなく、「できた」「分かった」という成功体験を通して、学習に対する肯定的な態度を育む点において教育的価値が高い。

一方で、これらの教育的価値は、スイミングにおけるインストラクターの指導のみで完結するものではない。教員が授業のねらいや教育的意図を明確にし、学習の意味づけや振り返りを行うことで、はじめて学校教育としての価値が十分に発揮される。すなわち、民間連携による水泳授業の教育的価値は、「専門性の活用」と「学校教育としての意味づけ」が相互に補完し合う関係の中で成立していると捉えることができる。

以上のことから、民間と連携した水泳授業は、技能・安全・態度といった複数の側面において教育的価値を有する実践であり、適切な連携と役割分担のもとで実施されることにより、学校体育の質を高める可能性を持つ取組であると考えられる。

### (2)教員の負担軽減

民間と連携した水泳授業の特徴として、教員の業務負担や安全面に対する心理的負担の軽減が挙げられる。アンケート調査やインタビュー調査からは教員の負担軽減について、水中での直接的な技術指導をはじめ、施設や水質の管理、天候による実施の判断などの業務がなくなることで、児童生徒の様子把握に集中できる環境が整っていることが明らかとなった。この点は、単なる「業務量の削減」として捉えるだけでな

く、今後、民間と連携した水泳授業における教員の役割が再構成されていくものだと考えることができる。

一方で、教員の指導への関与の度合いについては学校ごとに差が見られた。授業への関わり方が限定的になることで、学習内容や評価に対する理解が十分に共有されないケースも指摘されており、負担軽減と教育的関与のバランスについては慎重な検討が必要である。

### (3)連携の在り方と学習評価に関する課題

民間との連携による水泳授業の成果が安定的に発揮されるためには、学校とスイミングとの連携の質が重要な要素となる。インタビュー調査からは、事前の打ち合わせや情報共有が十分に行われている学校では、授業運営が円滑であり、教員とインストラクターの間に共通理解が形成されていることが示された。一方で、連携が形式的にとどまっていたり行われていなかったりした場合には、単元の目標や授業のねらい、評価の観点が曖昧になる傾向も見られた。

特に学習評価の在り方については、課題が残されている。技能面の評価は比較的行いやすい一方で、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価が十分に整理されていない状況が確認された。これは、インストラクターが技術指導を担う場合においても、水泳の単元として子どもたちにどのような資質・能力を身に付けさせたいか、そして技能以外の指導をどのように位置づけるのかという制度的・実践的課題とも関係している。

このような状況から、民間との連携による水泳授業を学校教育の一環として位置づけるためには、指導と評価の一体化に向けた役割分担を明確にし、教員が子どもたちへの指導を行える仕組みや準備などの単元構成を整える必要があることが示唆される。

### (4)学校体育における民間との連携の位置づけ

以上の考察から、民間と連携した水泳授業は、専門性と安全性を強みとし、児童生徒の泳力や学習意欲を高める有効な手段である一方、連携の在り方次第でその効果が左右される側面を有していることが明らかになった。特に、事前・事後の情報共有、教員の役割、学習評価の整理、といった点は、民間と連携した水泳授業を今後、学校体育として実施する上での重要な論点である。

民間と連携した水泳授業は、プールの老朽化や費用面から学校体育を代替するものではなく、学校教育を補完・強化する仕組みとして位置づける必要がある。そのためには、教員とスイミング、そして自治体が対等な立場で目的を共有し、教育的意義を確認しながら授業を構築していく視点が求められる。

## 5. 今後の民間と連携した水泳授業への示唆

本章では、前章までの調査分析および考察を踏まえ、民間と連携した水泳授業を今後さらに効果的かつ持続的に実施していくための具体的な方策について提言する。提言にあたっては、学校体育としての水泳授業の教育的意義を損なうことなく、スイミングの専門性を最大限に活用する視点を重視する。

### (1) 連携した水泳授業の構築に向けた事前の打ち合わせの重要性

民間と連携した水泳授業の成果を安定的に確保するためには、学校とスイミング、各自治体との連携体制をより明確かつ計画的に構築することが不可欠である。調査結果からは、授業に向けた事前の打ち合わせや児童生徒の情報共有が十分に行われている学校ほど、授業運営が円滑であり、授業内での教員とインストラクターの役割分担が明確になっていることが示された。

今後は、授業開始前における指導方針や単元計画、児童生徒の実態に関する情報共有などを制度的に位置づけることが求められる。

#### ア 単元の目標・授業のねらいの共有

当該水泳授業のねらいや単元の目標について、教員とスイミング、各自治体間で共通理解を図ることが重要である。単に泳力の向上を目的とするのではなく、「発達段階に応じた到達目標」、「安全意識や水への親しみの育成」、「意欲的に学ぶ態度の育成」などといった体育・保健体育科としての視点を共有することで、指導の方向性に一貫性が生まれる。

#### イ 児童生徒の実態に関する情報共有

児童生徒一人ひとりの実態について、可能な範囲で事前に情報共有を行うことが求められる。具体的には、「泳力の差や水への不安の有無」、「健康面・配慮を要する事項」、「集団としての特徴や学級・学年の雰囲気」などを共有することで、インストラクターはより適切な指導方法を検討することができる。これは、安全管理の面からも極めて重要である。

#### ウ 役割分担と指導体制の確認

事前打ち合わせでは、教員とインストラクターの役割分担を明確にしておく必要がある。特に、「水中での技術指導を誰が担うのか」、「プールサイドでの監視・全体把握を誰が担うのか」、「緊急時の対応手順と責任の所在」について具体的に確認することが重要である。これにより、授業中の混乱を防ぎ、安全で落ち着いた授業運営が可能となる。

## エ 学習の流れ・指導内容の確認

授業全体の流れや、1回のプールでの指導内容について事前に確認しておくことも重要である。特に、「導入・準備運動の進め方」、「泳力別指導の方法」、「活動の切り替えや集合の合図」などを共有しておくことで、教員とインストラクターが同じイメージをもって授業に臨むことができる。

## オ 安全管理とリスク対応に関する確認

水泳授業において最も重要なのが安全管理である。事前打ち合わせでは、「危険が想定される場面」、「注意すべき行動やルール」、「事故・体調不良時の対応手順※AEDの位置」について具体的に確認・共有する必要がある。教員とスイミングが同じ基準で安全を捉えることで、より確実な事故防止につながる。

以上の事項を事前に確認・共有することで、スイミングによる専門的な指導と、教員による教育的支援が有機的に結びつき、民間と連携した水泳授業の質と安全性が一層高まると考えられる。事前打ち合わせは単なる運営確認の場ではなく、教育的な共通理解を形成する重要な機会として位置づけることが求められる。

## (2) 教員による指導場面の重要性について

民間と連携した水泳授業においては、主にインストラクターが水中での専門的な技術指導を担う一方、教員はプール内外を通して、児童生徒の学習を支える重要な役割を果たしている。今後、連携の効果を一層高めるためには、教員による指導場면을意図的に位置づけ、プール内外での関わりを体系的に整理することが求められる。

### ア プール内における教員の指導・関わりについて

プール内における教員の関わりは、見守りや待機にとどまるような「補助的存在」ではなく、「教育的主体」として位置づける必要があると考える。

一つは、プールサイドから授業全体を俯瞰し、学習環境を支える役割を担う関わりである。インストラクターが水中で個別指導を行う中、教員は全体の安全確保や集団把握を中心に関与することが求められる。

二つは、インストラクターと共に入水して、指導に関わることである。入水する教員は、インストラクターとの役割分担を明確にし、児童生徒の学習を直接指導に当たったり支援をしたりするなどの関与が考えられる。

いずれにせよ、民間と連携した水泳授業においては、教員の関わり方を明確に位置づけ、意図的に設計することが、教育的価値を一層高めることにつながると考えられる。

### イ プール外における教員の指導・関わりについて

プール外における教員の関わりは、水泳授業全体の教育的価値を高めるうえで極めて重要である。今後は、プール外での指導を水泳授業の付随的な活動ではなく、学習の一部として明確に位置づける必要がある。

具体的には、授業前には水泳学習のねらいや安全に関する留意点を丁寧に説明し、児童生徒が見通しをもって授業に臨めるようにすることが重要である。これにより、水中での活動が単なる体験に終わらず、学習として意味づけられる。授業後には、振り返りの時間を設け、自身の取組や成長、安全意識について言語化する機会を確保することが望ましい。教員がこの振り返りを通して児童生徒の学びを整理することで、技能面だけでなく思考面や態度面を含めた総合的な学習評価につなげることが可能となる。

### (3)指導と評価の一体化に向けて

民間と連携した水泳授業では、インストラクターが水中での専門的な技術指導を担う一方、教員はプール内外を通して児童生徒の学習を促す役割を果たしている。しかし現状では、指導と評価が必ずしも一体的に捉えられておらず、評価が技能面に偏りがちであるという課題が見られる。今後、民間と連携した水泳授業を学校体育として教育的価値があるものにしていくためには、教員による指導と評価の一体化のための視点が不可欠である。

#### **ア 教員による指導と評価の一体化に向けた視点**

教員が、水中での直接的な技術指導を担わない場合であっても、授業全体を通して児童生徒の学習過程を継続的に観察しなければならない。そのため、教員の役割を「指導補助」や「安全管理」に限定するのではなく、学習過程を捉え、評価につなげる主体として明確に位置づけることが重要である。

具体的には、児童生徒の学習への意欲、安全に関する行動、仲間との関わり方、課題を克服しようとする姿勢や工夫など、技能以外の学習成果を教員が意図的に観察・記録し、評価に反映させる仕組みを整えることが求められる。

#### **イ プール内外の指導場面を通じた指導と評価**

民間と連携した水泳授業で指導と評価の一体化を図るためには、プール内外の指導場面を分断して捉えるのではなく、一連の学習として位置づける必要がある。例えば、プール内では、教員がプールサイドから児童生徒の様子を観察し、声かけや支援を行うことで学習を支えるとともに、その過程を評価の根拠として蓄積することが重要である。また、プール外においては、授業前のねらいの共有や、授業後の振り返りを通して、児童生徒自身が学びを言語化する機会を確保することが望ましい。これらの活動は、教員が学習の到達度や変容を把握し、評価を行ううえで重要な資料となる。

#### **ウ インストラクターからのフィードバック**

スイミングとの連携においては、インストラクターが把握している児童生徒の技能面の状況や学習上の特徴を、教員の評価に生かす視点も重要である。そのためには、授業後(単元終了後)の簡易的な情報共有やフィードバックの場を設け、インストラクターの観察内容を教員が評価の参考情報として活用できる体制を整える必要がある。

ただし、評価の最終的な判断主体は教員であることを明確にし、学校教育としての評価の一貫性と妥当性を確保することが求められる。

## エ 教員の専門性

以上の取組を通して、教員は民間と連携した水泳授業においても、指導と評価を一体的に捉え、教育的判断を行う立場としての専門性を発揮することが可能となる。これは、民間と連携した水泳授業を「全てを丸投げ」にすることなく、「学校主体」として行う学校体育として位置づけることにつながる。

スイミングの専門性を活用しつつ、教員が指導と評価の中核を担う体制を構築することは、民間と連携した水泳授業を持続可能な教育実践として発展させるための重要な視点である。

## おわりに

本研究では、民間と連携した水泳授業の在り方について実態と教育的意義を明らかにするため、児童生徒・教員・インストラクターを対象としたアンケート調査、教員・インストラクターへのインタビュー調査、並びに授業視察を通じた多角的な分析を行った。これらの量的・質的データを統合的に検討することで、民間と連携した水泳授業が有する成果と課題を、学校体育の文脈の中で捉えることを試みた。

調査結果からは、スイミングの専門性を生かした指導体制や安全管理が、児童生徒の学習意欲や安心感の向上に寄与していることが明らかとなった。また、泳力別指導や段階的なカリキュラム構成といった実践は、限られた授業時数の中でも一定の学習成果を確保する上で有効であることが示唆された。加えて、教員の業務負担や安全面に対する心理的負担の軽減という側面も、民間と連携した水泳授業の重要な意義として確認された。

一方で、連携の在り方や学習評価の整理、教員の関与の度合いといった点については、学校間で差が見られ、課題として残されていることも明らかとなった。特に、指導と評価の一体化や、学校とスイミング、各自治体との事前・事後の情報共有の在り方については、今後さらに検討を深める必要がある。民間との連携が単なる外部委託にとどまるのではなく、学校教育としての水泳授業の質を高める仕組みとして機能するためには、教員の役割を明確に位置づけることが不可欠である。

本研究を通して、民間と連携した水泳授業は、学校体育を代替するものではなく、学校体育を補完し、支える一つの有効な手段となり得ることを明らかにした。 重要なのは、専門性を有するスイミングと学校が対等な立場で目的を共有し、教育的意義を確認しながら連携していく姿勢である。そのための体制整備や共通理解の形成が、今後の実践において求められる。

今後は、本研究で得られた知見を踏まえ、地域や学校の実情に応じた民間連携モデルの検討や、より具体的な評価の在り方、教員研修との連動などについて、継続的に検証を重ねていく必要がある。本研究が、民間と連携した水泳授業の充実と、学校体育のさらなる発展に向けた一助となることを期待したい。

## 参考文献

- 文部科学省（2017）  
「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 体育編」東洋館出版社
- 文部科学省（2018）  
「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 保健体育編」東山書房
- 文部科学省（2014）  
「水泳指導の手引き(三訂版)」2014 年
- 日本スポーツ振興センター(2018)  
「学校における水泳事故防止必携『2018 年改訂版』」
- 大修館書店（2024）  
「体育科教育 2024. 7」－特集 学校プールの廃止と水泳授業の民間委託－
- 笹川スポーツ財団(2025)  
「市区町村における小学校の水泳（プール授業）実施状況 — 2024 全自治体調査」  
2025 年 - 公立小学校における「民間委託」「公共施設利用」の割合など、全国自治体の実態を示した直近の調査結果。  
[https://www.ssf.or.jp/thinktank/regional/municipality\\_2024\\_swimming.html?utm\\_source=chatgpt.com](https://www.ssf.or.jp/thinktank/regional/municipality_2024_swimming.html?utm_source=chatgpt.com)
- 笹川スポーツ財団(2024)  
「日本の水泳教育と施設－歴史的背景と現在の課題」全英文  
[https://www.ssf.or.jp/en/features/japans\\_data\\_plus\\_sports/e0021.html?utm\\_source=chatgpt.com](https://www.ssf.or.jp/en/features/japans_data_plus_sports/e0021.html?utm_source=chatgpt.com)
- 朝日新聞(2025)  
「水泳授業を民間スクール委託、鳥取市がモデル事業 老朽化や猛暑対策」 2025 年 8 月 29 日 - 学校プールの老朽化・猛暑対策として、民間スクール委託へ踏み切った自治体の事例  
[https://www.asahi.com/articles/AST8X43WQT8XPUUB001M.html?utm\\_source=chatgpt.com](https://www.asahi.com/articles/AST8X43WQT8XPUUB001M.html?utm_source=chatgpt.com)

## 付録（単元構造図）

本付録では、民間と連携した水泳授業を実施する際の単元計画例を、単元構造図を用いて示しています。本文では、アンケート、インタビュー、授業視察の結果から、水泳授業における教育的価値、教員の関わり方、学習評価の在り方などについて整理し、今後の民間と連携した水泳授業への示唆を提言しました。本付録は、それらの成果を踏まえ、学校として水泳授業をどのように設計・運営するか、学校として何を整える必要があるかを具体的に示すことを目的としています。

なお、本付録に示す単元計画例(単元構造図)は、各自治体や各学校の実態に応じて柔軟に再構成されることを前提としています。児童生徒の実態、施設条件、教員体制、連携形態に応じて調整しながら、学校体育としての水泳授業の質保証を図るための参考資料として活用されることを期待します。

### 単元計画例(単元構造図)の見方

#### 【1】「単元を貫く問い」や「単元テーマ」について

この単元で教師が児童生徒に何を身に付けさせたいのか、どのような姿を目指すのか等を示しています。

#### 【2】単元目標について

学習指導要領の項目に合わせて(知識及び技能)、(思考力、判断力、表現力等)、(学びに向かう力・人間性等)で示しています。

#### 【3】評価規準について

単元目標の実現状況を把握するための規準(おおむね満足できる状況)を設定しています。

#### 【4】学習の流れについて

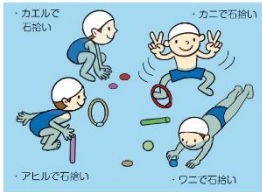
単元計画の実現を目指して、実際の授業で誰が(教師・インストラクター)、何を教えるのか(指導内容)、どのような活動を行うのかを明確にし、縦と横の時系列(分・単位時間)で配列しています。なお、ここにはプールまでの移動時間は含んでいません。また、時数において()で示しているのはプールでの活動時間とします。そのため、実際には適宜休憩を入れるようにして下さい。

#### 【5】評価機会について

評価を実施する主体は教員です。評価規準の内容に沿って形成的な評価を行うために、いつ(何時間目)、何について(観点別)評価を行うか明確にします。



※学習の流れに記載している「イ」はインストラクター、「教」は教員のことです。技術指導を担う指導者を示している。例えば、「イ1」はインストラクターが1名で「イ1・教1」はインストラクター1名と教員1名の2名でグループを指導するということです。

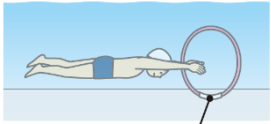
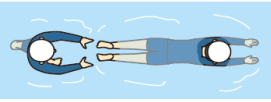
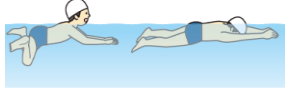
## 小学校低学年(第1学年及び第2学年) 単元名【水遊び】

| 「単元を貫く問い」や「単元のテーマ」                              |  |   |   |
|---|--|---|---|
| 水につかって歩いたり走ったり、水にもぐったり浮いたりする楽しさに触れることができるようにする。 |  |   |   |
| 単元目標  | (知識及び技能)<br>水の中を移動する運動遊び、もぐる・浮く運動遊びの楽しさに触れ、行い方を知るとともに、水につかって歩いたり走ったりすること、息を止めたり吐いたりしながらもぐったり浮いたりして遊ぶことができるようにする。 |   |   |
|   | (思考力、判断力、表現力等)<br>水の中を移動したり、もぐったり浮いたりする簡単な遊び方を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。                                  |   |   |
|   | (学びに向かう力、人間性等)<br>運動遊びに進んで取り組み、順番やきまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、水遊びの心得を守って安全に気を付けたりすることができるようにする。                          |   |   |
| 時数  | 1 (教室)   | 2・3 (プール)   |   |
| 学習の流れ   | 5 (10)   | オリエンテーション<br>1 学習の見通し<br>○単元の目標<br>○移動方法<br>○準備物                                    | 1 準備運動<br>○様々な部位の伸張、回旋等<br>2 水慣れ<br>○水かけじゃんけん<br>○電車ごっこ   |
|   | 10 (20)  | 2 約束の確認<br>○着替え、トイレ<br>○プールサイド<br>○安全の心得  |   |
|   | 15 (30)  | 3 運動遊びの紹介<br>○水の中を移動する運動遊び<br>○もぐる・浮く運動遊び   | 3 グループ別に分かれた運動遊び<br><small>※教師はプールサイドから俯瞰して全体の態度の様子を見るようにする</small><br>【クラゲグループ】「イ1」<br>水中歩き→カニ歩き(息をぶくぶく)<br>→ワニ歩き→宝探しゲーム等<br><br>【アシカグループ】「イ1」<br>鬼ごっこ→アヒルで石拾いゲーム<br>→バブリング→くらげ浮き等<br><br>【イルカグループ】「イ1」<br>動物鬼ごっこ→バブリング<br>→水中じゃんけん→大の字浮き等 |
|   | 20 (40)  |  |   |
|   | 25 (50)  |   |   |
|   | 30 (60)  | 4 めあての決定<br>○自分の目標を設定   |   |
|   | 35 (70)  | 4 振り返り<br>○できるようになったこと、がんばったことを発表し、評価する<br>5 整理運動<br>○様々な部位の伸張、回旋等                  |   |
|   | 40 (80)  |   |   |
|   | 45 (90)  |   |   |
| 評価機会  | 知識   |   | ①②  |
|   | 技能   |   |   |
|   | 思・判・表  |   |   |
|   | 態度   |   | ①   |



|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 評価<br>規<br>準  | 知識  | ①水の中を移動する運動遊びの行い方について、言ったり実際に動いたりしている。(行い方)<br>②もぐる・浮く運動遊びの行い方について、言ったり実際に動いたりしている。(行い方)  |   |
|   | 技能  | ①水の中をいろいろな姿勢で歩いたり、自由に方向や速さを変えて走ったりして遊ぶことができる。(移動)<br>②息を止めたり吐いたりしながら、いろいろな姿勢でもぐったり浮いたりして遊ぶことができる。(もぐる・浮く)   |   |
|   | 思・判・表   | ①友達のよい動きを見付けたり、考えたりしたことを友達に伝えている。(表現)   |   |
|   | 態度  | ①水遊びの心得を守って安全に気を付けている。(健康・安全)<br>②水遊びに進んで取り組もうとしている。(愛好的態度)   |   |
| 4・5 (プール)   |   | 6・7 (プール)   | 8 (教室)  |
| 1 準備運動 ○様々な部位の伸張・回旋等<br>2 水慣れ ○水かけじゃんけん・電車ごっこ<br>3 グループに分かれた運動遊び  |   |   | リフレクション<br>1 分かったこと<br>○～～すれば、水中で早く動くことができる。<br>○大きく息を吸うと長く潜ることができる。<br>2 できたこと<br>○たくさんの動物になりきって動いた。<br>○水の中で目を開けてジャンケンした。<br>3 今後に向けて<br>○めあての～～は達成できた。次は、水中で目を開けたい。<br>○3年生では、浮いて遠くまで進みたい。 |
| 【クラゲグループ】<br>「イ1」<br>○ワニになって手を床について歩く<br><br>○宝探しゲーム<br>○ピンポン玉吹き集めゲーム<br>○壁につかまって浮く・膝を曲げて立つ<br>○チーム対抗ジャンケン手くぐり | 【アシカグループ】<br>「イ1」<br>○動物鬼ごっこ<br>○バディで協力潜りっこ<br>○ピンポン玉吹きラリー<br>○バディにつかまって浮く・膝を曲げて立つ<br>○潜って目を開ける(水中ジャンケン)<br> | 【イルカグループ】<br>「イ1・教1」<br>○手つなぎ鬼<br>○バディで協力浮きっこ<br><br>○いかだ引き<br>○4人手つなぎ潜り<br>○リングとりゲーム<br>○チーム対抗じゃんけんまたくぐり |   |
| 4 振り返り<br>○できるようになったこと、がんばったことを発表し、評価する<br>5 整理運動<br>○様々な部位の伸張、回旋等  |   |   |   |
|   |   |   | ①②  |
|   | ①   | ②   |   |
|   | ①   |   | ①   |
|   |   | ①   | ②   |


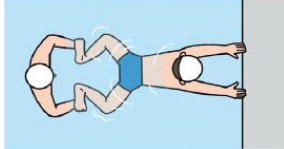
## 小学校中学年(第3学年及び第4学年) 単元名【水泳運動】

| 「単元を貫く問い」や「単元のテーマ」                                       |   |   |   |
|--|---|---|---|
| 水に浮いて進んだり呼吸したり、様々な方法で水にもぐったり浮いたりする楽しさや喜びに触れることができるようにする。 |   |   |   |
| 単<br>元<br>目<br>標   | (知識及び技能)<br>浮いて進む運動、もぐる・浮く運動の楽しさや喜びに触れ、行い方を知るとともに、け伸びをすること、息を止めたり吐いたりしながらいろいろなもぐり方や浮き方をすることができるようにする。 |   |   |
|  | (思考力、判断力、表現力等)<br>自己の能力に適した課題を見付け、水の中での動きを身に付けるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。                |   |   |
|  | (学びに向かう力、人間性等)<br>運動に積極的に取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、友達の考えを認めたり、水泳運動の心得を守って安全に気を付けたりすることができるようにする。       |   |   |
|  | 時数  | 1 (教室)  | 2・3 (プール)   |
| 学<br>習<br>の<br>流<br>れ                                    | 5 (10)  | オリエンテーション<br>1 学習の見通し<br>○単元の目標<br>○移動方法<br>○準備物                                    | 1 準備運動<br>○様々な部位の伸張、回旋等<br>2 水慣れ<br>○水中じゃんけん<br>○水中伝言ゲーム          |
|  | 10 (20)   | 2 約束の確認<br>○着替え、トイレ<br>○プールサイド<br>○安全の心得  | 3 コース別に分かれた運動<br>【ぐんぐんグループ】「イ1・教1」<br>動物鬼ごっこ→ボビング<br>→伏し浮き→け伸び競争等 |
|  | 15 (30)   | 3 運動の紹介<br>○浮いて進む運動<br>○もぐる・浮く運動  | 【どんどんグループ】「イ1」<br>ボビングリレー→け伸び競争<br>→呼吸をしながらの初歩的な泳ぎ等               |
|  | 20 (40)   |  | 【すいすいグループ】「イ1」<br>け伸びリレー→、呼吸をしながらの初歩的な泳ぎ→補助具を使った泳ぎ等               |
|  | 25 (50)   |  | 4 振り返り<br>○できるようになったこと、がんばったことを発表し、評価する                           |
|  | 30 (60)   |   | 5 整理運動<br>○様々な部位の伸張、回旋等   |
|  | 35 (70)   |   |   |
|  | 40 (80)   |   |   |
|  | 45 (90)   | 4 めあての決定<br>○自分の目標を設定   |   |
| 評<br>価<br>機<br>会   | 知識  |   | ①②  |
|  | 技能  |   |   |
|  | 思・判・表   |   |   |
|  | 態度  |   | ①   |

|  |       |   |  |   |  |
|--|-------|---|--|---|--|
| 評価規準   | 知識    | ①浮いて進む運動の行い方について、言ったり書いたりしている。(行い方)<br>②もぐる・浮く運動の行い方について、言ったり書いたりしている。(行い方)   |  |   |  |
|  | 技能    | ①補助具を用いて浮き、呼吸をしながら手や足を動かして進む初歩的な泳ぎをすることができる。(初歩的な泳ぎ)<br>②プールの底から足を離して、体の一部分をプールの底につけるようにもぐるることができる。(もぐる)<br>③大きく息を吸い込み全身の力を抜いて、背浮きやだるま浮きなどのいろいろな浮き方をすることができる。(浮く)   |  |   |  |
|  | 思・判・表 | ①自己の能力に適した課題を見付け、その課題の解決のための活動を選んでいる。(課題解決)   |  |   |  |
|  | 態度    | ①水泳運動の心得を守って安全に気を付けている。(健康・安全)<br>②水泳運動に進んで取り組もうとしている。(愛好的態度)   |  |   |  |
| 4・5 (プール)  |       | 6・7 (プール)   |  | 8 (教室)  |  |
| <p>1 準備運動 ○様々な部位の伸張・回旋等<br/>2 水慣れ ○水中じゃんけん・変身浮き<br/>3 グループ (課題) に分かれた運動</p>  |       |   |  |   |  |
| <p>【ぐんぐんグループ】<br/>「イ1・教1」<br/>○集団浮き<br/>○フラフープくぐり</p>  <p>おもり</p> <p>○浮いた状態で自分なりの手足の動きをつけて進む<br/>○バタ足相撲<br/>○かえる足相撲<br/>○呼吸をしながらの初歩的な泳ぎ</p> |       | <p>【どんどんグループ】<br/>「イ1」<br/>○け伸び競争<br/>○バディに足を押しもらいながらけ伸び</p>  <p>○補助具を使ったクロール系の泳ぎ<br/>○補助具を使った平泳ぎ系の泳ぎ<br/>※自分の課題に合った場で練習する</p> |  | <p>【すいすいグループ】<br/>「イ1」<br/>○け伸び鬼ごっこ<br/>○背浮き (補助具)<br/>○補助具を使ったクロール系の泳ぎ<br/>○補助具を使った平泳ぎ系の泳ぎ<br/>○面被りクロール<br/>○面被り平泳ぎ<br/>○呼吸を伴う初歩的な泳ぎ<br/>・ばた足泳ぎ<br/>・かえる足泳ぎ</p>  | <p>リフレクション<br/>1 分かったこと<br/>○体の力を抜くと長く浮くことができる。<br/>○体を1本の棒と考え、ピンと伸ばすと伸びでよく進む。</p> <p>2 できたこと<br/>○ビート板を使って、クロールの手の動きを練習することができた。<br/>○息継ぎをするときの呼吸のポイントが分かった。</p> <p>3 今後に向けて<br/>○めあての~~は達成できた。来年は、クロールで長く泳ぎたい。</p> |
| <p>4 振り返り<br/>○できるようになったこと、がんばったことを発表し、評価する<br/>5 整理運動<br/>○様々な部位の伸張、回旋等</p>   |       |   |  |   |  |
|  |       |   |  | ①②  |  |
| ②③   |       | ①   |  |   |  |
|  |       | ①   |  | ①   |  |
| ①  |       |   |  | ②   |  |

## 小学校高学年(第5学年及び第6学年) 単元名【水泳運動】

| 「単元を貫く問い」や「単元のテーマ」   |   |   |  |
|--|---|---|--|
| <p>続けて長く泳いだり、泳ぐ距離や浮いている時間を伸ばしたり、記録を達成したりする楽しさや喜びを味わうことができるようにする。</p> |   |   |  |
| 単<br>元<br>目<br>標   | <p>(知識及び技能)<br/>クロール、平泳ぎの楽しさや喜びを味わい、行い方を理解するとともに、手や足の動きに呼吸を合わせて続けて長く泳ぐことができるようにする。</p>                  |   |  |
|  | <p>(思考力、判断力、表現力等)<br/>自己の能力に適した課題の解決の仕方や記録への挑戦の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを友達に伝えることができるようにする。</p>           |   |  |
|  | <p>(学びに向かう力、人間性等)<br/>運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、水泳運動の心得を守って安全に気を付けたりすることができるようにする。</p> |   |  |
|  | 時数  | 1 (教室)  | 2・3 (プール)  |
| 学<br>習<br>の<br>流<br>れ  | 5 (10)  | オリエンテーション<br>1 学習の見通し<br>○単元の目標<br>○移動方法<br>○準備物                                    | <p>1 準備運動<br/>○様々な部位の伸張、回旋等<br/>2 水慣れ<br/>○水中じゃんけん<br/>○ばた足相撲、かえる足相撲</p> <p>3 コース別に分かれた運動<br/>【ぐんぐんグループ】「イ1」<br/>け伸び競争→け伸びからばた足<br/>→面被りクロール等</p> <p>【どんどんグループ】「イ1・教1」<br/>け伸びリレー→け伸びからばた足<br/>→面被りクロール・平泳ぎ等</p> <p>【すいすいグループ】「イ2」<br/>け伸びからばた足→面被りクロール<br/>→呼吸を伴う初歩的な泳ぎ等</p> <p>4 振り返り<br/>○できるようになったこと、がんばったことを発表し、評価する<br/>5 整理運動<br/>○様々な部位の伸張、回旋等</p> |
|  | 10 (20)   | 2 約束の確認<br>○着替え、トイレ<br>○プールサイド<br>○安全の心得  |  |
|  | 15 (30)   | 3 運動の紹介<br>○クロール<br>○平泳ぎ<br>○安全確保につながる運動  |  |
|  | 20 (40)   |  |  |
|  | 25 (50)   |  |  |
|  | 30 (60)   |   |  |
|  | 35 (70)   |   |  |
|  | 40 (80)   |   |  |
| 45 (90)  | 4 めあての決定<br>○自分の目標を設定   |   |  |
| 評<br>価<br>機<br>会   | 知識  |   | ①②   |
|  | 技能  |   |  |
|  | 思・判・表   |   |  |
|  | 態度  |   | ①  |

|  |  |  |   |
|--|--|--|---|
| 評価<br>規<br>準   | 知識   | ①クロールの行い方について言ったり書いたりしている。<br>(行い方)<br>②平泳ぎの行い方について、言ったり書いたりしている。<br>(行い方)   |   |
|  | 技能   | ①左右の手を入れ替える動きに呼吸を合わせて、泳ぐことができる。(クロール)<br>②手の動きに合わせて呼吸し、キックの後には息を止めてしばらくしてから伸びて、泳ぐことができる。(平泳ぎ)  |   |
|  | 思・判・表  | ①課題の解決のために自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。(表現)  |   |
|  | 態度   | ①水泳運動の心得を守って安全に気を配っている。(健康・安全)<br>②水泳運動に積極的に取り組もうとしている。(愛好的態度)   |   |
| 4・5 (プール)  |  | 6・7 (プール)  | 8 (教室)  |
| 1 準備運動 ・様々な部位の伸張、回旋等<br>2 水慣れ ・水中じゃんけん ・浮き、沈み<br>3 グループ (課題) に分かれた運動   |  |  | リフレクション<br>1 分かったこと<br>○クロールでは手のかき(水を押し出す動き)が大切だ。<br>○平泳ぎではキックの後に体を伸ばすと前に進む。<br>2 できたこと<br>○友達にかえる足のコツを教えてもらってできるようになった。<br>3 今後に向けて<br>○もっと長く泳げるように自分でも練習してみよう。<br>○中学校での学習では、新しい泳ぎに挑戦したい。 |
| 【クロールグループ】<br>「イ1」<br>○手のかきの練習<br>○呼吸の練習<br><br>○バタ足の練習<br>※児童同士で教え合いができるようにパディを組む<br>※補助具を使ったり距離を少しずつ伸ばしたりするなど段階的に行う | 【平泳ぎグループ】<br>「イ1」<br>○手のかきの練習<br>○呼吸の練習<br>○かえる足の練習<br><br>※児童同士で教え合いができるようにパディを組む<br>※補助具を使ったり距離を少しずつ伸ばしたりするなど段階的に行う | 【長く泳ぐグループ】<br>「イ1・教1」<br>○より長く泳ぐことができるような体の使い方を考える<br>・1ストロークで進む距離が伸びるように意識<br>・手や足の動きと呼吸のタイミングを合わせるように意識<br>※児童同士で教え合いができるようにパディを組む |   |
| 4 振り返り<br>○できるようになったこと、がんばったことを発表し、評価する<br>5 整理運動<br>○様々な部位の伸張、回旋等   |  |  |   |
|  |  |  | ①②  |
|  | ①  |  | ②   |
|  |  | ①  | ①   |
|  | ①  |  | ②   |



|   |       |  |  |
|---|-------|--|--|
| 評価<br>規<br>準  | 知識    | ①クロールもしくは背泳ぎの技術の名称や運動局面の名称があり、それぞれの技術や局面で、動きを高めるための技術的なポイントがあることについて書き出している。(名称・行い方)   |  |
|   | 技能    | ①クロールでは、一定のリズムで強いキックを打ち、水中で肘を曲げて腕全体で水をキャッチし、S字やI字を描くようにして水をかくことができる。<br>②背泳ぎでは、水平に浮いてキックし、水中で肘を曲げて書くことができる。  |  |
|   | 思・判・表 | ①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。(課題発見)  |  |
|   | 態度    | ①水の安全に関する事故防止の心得を遵守するなど、健康・安全に留意している。(健康・安全)<br>②水泳に積極的に取り組もうとしている。(愛好的態度)   |  |
| 4・5 (プール)   |       | 6・7 (プール)  | 8 (教室)   |
| 1 健康観察及びバディの確認・準備運動：様々な部位の伸張、回旋等<br>2 グループ別で水慣れ (25m泳・プールサイドキック・水中じゃんけん等)   |       |  | リフレクション  |
| 3 泳力別グループ別に分かれた学習<br>【Aグループ】：基礎コース 「イ2」<br>プールサイドからキックの練習 → け伸びの確認 → ビート板を使ってキックの練習 → ビート板を使ってストロークの練習<br>【Bグループ】：安定コース 「イ1・教1」<br>け伸びの練習 → 面かぶりクロール → ビート板を使って片手クロール<br>【Cグループ】：発展コース 「イ1」<br>W-UPで自由に25mを4本泳ぐ → キャッチを意識する練習 → ローリングと呼吸を合わせる練習 |       | 3 泳力別グループ別に分かれた学習<br>【Aグループ】：基礎コース 「イ2」<br>プールサイドからキックの練習 → ビート板を使ってストロークの練習 → 壁から泳ぐ<br>【Bグループ】：安定コース 「イ1・教1」<br>ビート板を使って泳ぐ → 壁から12.5以上m泳ぐ<br>【Cグループ】：発展コース 「イ1」<br>自己の課題を意識して25mを泳ぐ | 1 個人で振り返り<br>○できるようになったこと<br>○新しく気づいたこと<br>○自分で工夫したこと<br>○これからさらに頑張りたいこと<br>2 グループで共有<br>○成果や工夫を共有<br>3 まとめ<br>○教師からの価値づけ<br>○次の単元に向けて |
| 4 記録会に向けた練習<br>各グループ別に25mを泳ぐ<br>※自己の課題を意識して泳ぐように促す  |       | 4 記録会<br>各グループ別に25mを泳ぐ<br>※教師が水中での姿勢、キックやストロークを見て評価する。   |  |
| 4 整理運動<br>○様々な部位の伸張、回旋等<br>5 振り返り<br>○学習シートに振り返りを記入(入力)する。  |       |  |  |
|   |       |  | ①  |
|   |       | ①②   |  |
| ①   |       |  | ①  |
|   |       |  | ②  |

## 研究組織

### ●調査研究アドバイザー

|       |     |       |
|-------|-----|-------|
| 西九州大学 | 准教授 | 松本 大輔 |
| 久留米大学 | 准教授 | 行實 鉄平 |

### ●調査研究事業協力校

#### 小学校

|            |                  |
|------------|------------------|
| 古賀市立古賀西小学校 | クロスパルこが          |
| 宇美町立原田小学校  | ビートスイミングクラブ      |
| 遠賀町立浅木小学校  | オールウェイズスイミングクラブ  |
| 直方市立直方南小学校 | 直方スイミングスクール野上    |
| 八女市立福島小学校  | イトマンスイミングスクール八女校 |
| 大川市立大川小学校  | 大川スイミングスクール      |
| 豊前市立八屋小学校  | アイルスポーツ豊前        |

#### 中学校

|             |                   |
|-------------|-------------------|
| 古賀市立古賀中学校   | クロスパルこが           |
| 宇美町立宇美東中学校  | コナミスポーツクラブ 大野城    |
| 八女市立黒木中学校   | イトマンスイミングスクール八女校  |
| 大牟田市立白光中学校  | イトマンスイミングスクール大牟田校 |
| 飯塚市立飯塚第二中学校 | 福岡カホスイミングスクール     |

### ●令和7年度福岡県体育研究所（事務局、編集委員等）

|         |         |
|---------|---------|
| 所長      | 権藤 誠治   |
| 次長      | 未竹 知香   |
| 総括指導主事  | 小松原 麻衣子 |
| 主任指導主事  | 藤崎 厚志   |
| 指導主事    | 小塩 淑恵   |
| 指導主事    | 一木 一文   |
| 指導主事    | 石崎 幸太郎  |
| 指導主事    | 山口 拓郎   |
| 主事補     | 谷口 晴登   |
| 長期派遣研修員 | 萱嶋 勝平   |
| 長期派遣研修員 | 高倉 悠    |
| 長期派遣研修員 | 西ノ明 達仁  |

---

---

令和7年度 福岡県体育研究所 調査研究報告書  
「民間と連携した水泳授業の在り方」

令和8年3月発行（非売品）

---

---

編集・発行

福岡県体育研究所

〒812-0852

福岡県福岡市博多区東平尾公園2丁目1番4号

（福岡県立スポーツ科学情報センター内）

TEL 092-611-0220

FAX 092-611-1747

E-mail: taiikukenyusho@pref.fukuoka.lg.jp

印刷所

株式会社 ビー・ピー・シー

| 福岡県行政資料    |                  |
|------------|------------------|
| 分類番号<br>IA | 所属コード<br>2124100 |
| 登録年度<br>7  | 登録番号<br>0001     |



福岡県体育研究所



Instagram



WEB

**FUKUOKA RESEARCH INSTITUTE OF PHYSICAL EDUCATION**